

(6) 社会的ひきこもりについて

社会的ひきこもりとは、「仕事や学校に行かず、かつ家族以外の人と交流をほとんどせずに、6ヶ月以上続けて自宅にひきこもっている」状態にある人のことを言います。西宮市においては、社会的ひきこもりの相談事業等を実施していますが、当市のひきこもりの実態を把握し、今後の社会的ひきこもりの事業に役立てていきたいと考えています。

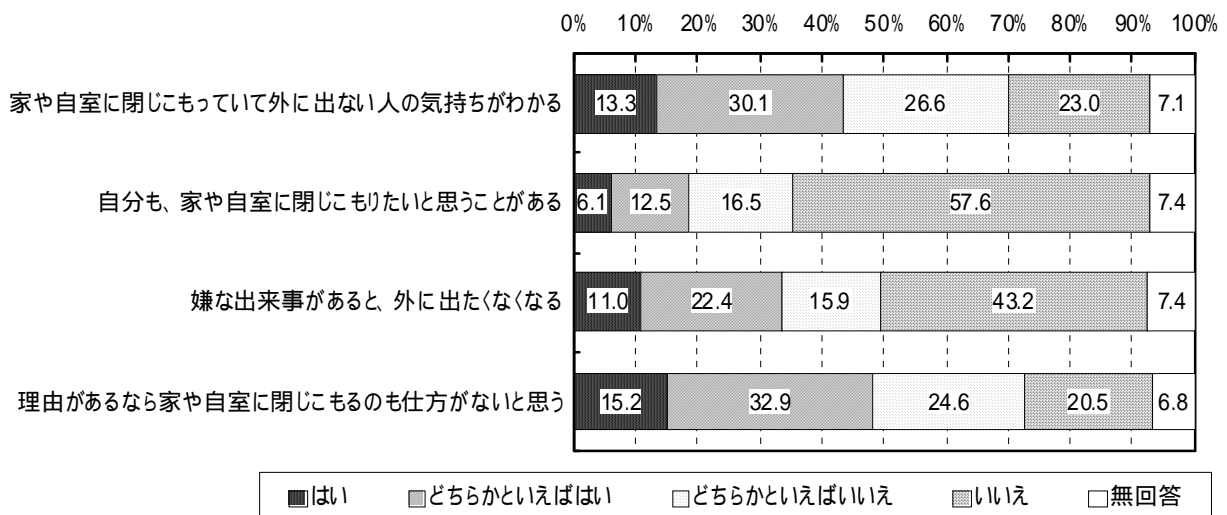
ひきこもりへの共感度

問31 以下のア.～エ.それぞれについて、あなたご自身があてはまるものを選び、1～4のいずれかにをつけてください。

理由があるなら家や自室に閉じこもるのも仕方ない、外に出ない人の気持ちがわかるという人が4～5割。

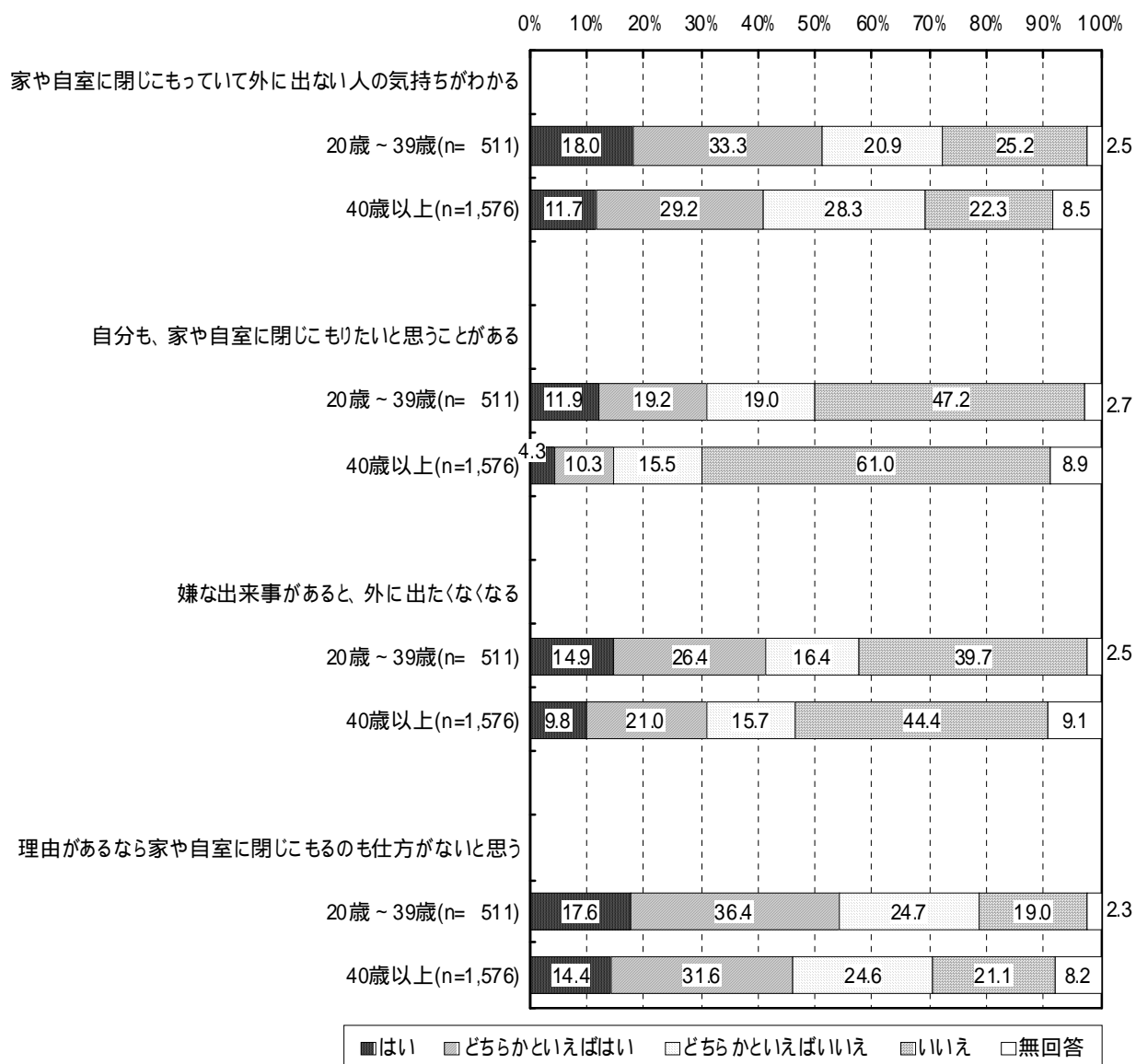
- ・社会的ひきこもりに対する共感度を表わす4つの項目について尋ねたところ、「はい」と「どちらかといえばはい」を合計すると、『理由があるなら家や自室に閉じこもるのも仕方ないと思う』が48.1%、『家や自室に閉じこもっていて外に出ない人の気持ちがわかる』が43.4%、『嫌な出来事があると、外に出たくなる』が33.4%、『自分も、家や自室に閉じこもりたいと思うことがある』が18.6%という結果となっている。

ひきこもりへの共感度(n=2,094)



- ・国の実施した「若者の意識に関する調査（ひきこもりに関する実態調査）」の対象年齢は15歳から39歳であることから、今回の調査結果を20歳から39歳までと40歳以上の2つの年齢区分に分けてみると、4つの項目のすべてで「はい」「どちらかといえばはい」と答える人の割合が20歳から39歳までの回答者で高くなっている。

ひきこもりへの共感度《年齢区分別》



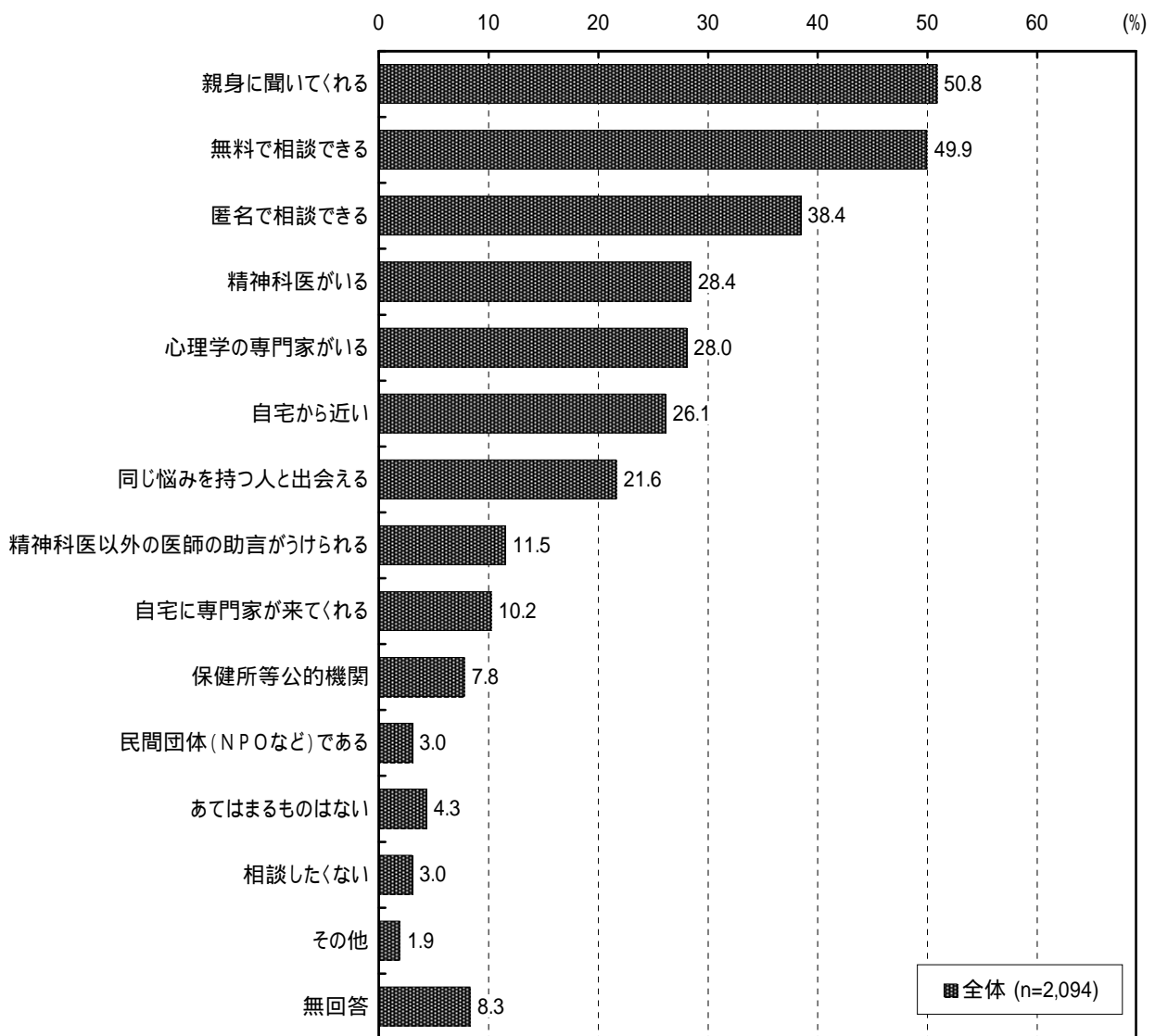
心の悩みについて相談したい窓口

問32 あなたもしくは同居のご家族の心の悩みについて、どのような相談窓口なら相談したいと思いますか。(あてはまるものをすべて選んで)

親身になってくれる窓口、無料で相談できる窓口を求める声が5割。

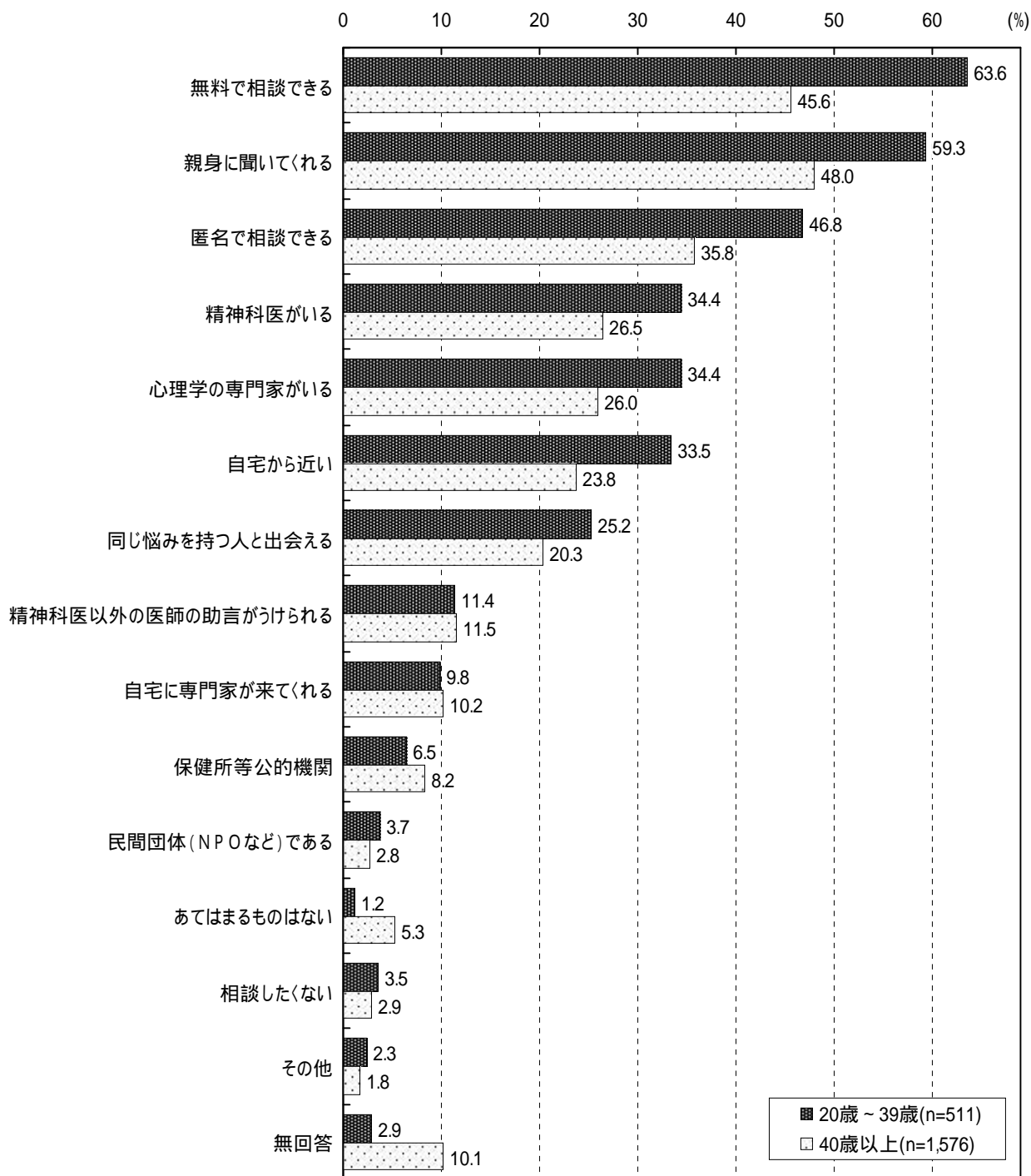
- ・心の悩みについて相談したい窓口については、「親身に聞いてくれる」が50.8%と最も多く、次いで「無料で相談できる」が49.9%、「匿名で相談できる」が38.4%、「精神科医がいる」が28.4%、「心理学の専門家がいる」が28.0%、「自宅から近い」が26.1%、「同じ悩みを持つ人と出会える」が21.6%などと続いている。

心の悩みについて相談したい窓口



- ・年齢区分ごとに見ると、全体で上位にある項目については20歳から39歳までの回答者でより高い割合を示しており、なかでも「無料で相談できる」は63.6%、「親身に聞いてくれる」も59.3%と6割前後を占めている。

心の悩みについて相談したい窓口《年齢区分別》

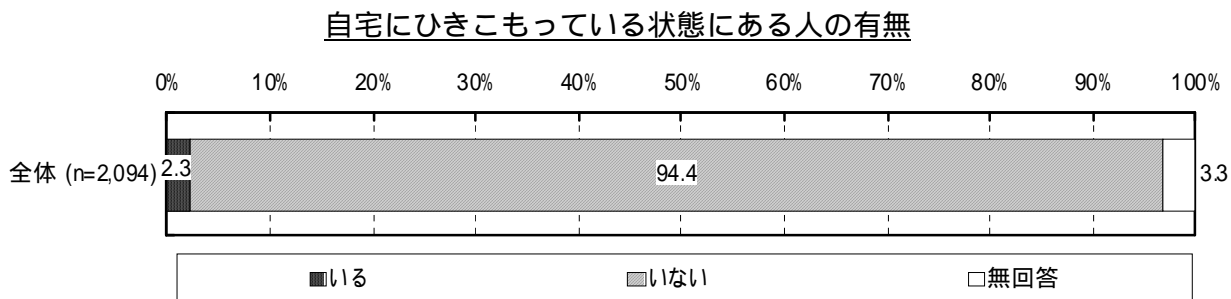


自宅にひきこもっている状態にある人の有無とその人の状況

問33 あなたもしくは同居する家族に、自宅にひきこもっている状態にある人はいますか。
(1つ選んで)

同居家族に自宅にひきこもっている状態にある人がいると答えた人は2.3%。

・自宅にひきこもっている状態にある人が「いる」との回答は2.3%となっている。



問34 ひきこもりの状態にあるのは、どのような方ですか。さしつかえのない範囲でお答えください。

ひきこもりの状態にあるのは本人や子ども。

・ひきこもりの状態にある人について尋ねたところ、続柄については「本人」と「子ども」、性別については「女性」が多く、年齢は「本人」は40歳以上、「子ども」は15歳から39歳までの人が多くなっている。

ひきこもりの状態にある人の状況

ひきこもりの状態にある人	全体	性別			年齢別			
		男性	女性	無回答	14歳以下	15～39歳	40歳以上	無回答
本人	0.86%	0.33%	0.53%	0.00%	0.00%	0.24%	0.57%	0.05%
配偶者	0.33%	0.10%	0.13%	0.10%	0.00%	0.10%	0.13%	0.10%
子ども	0.86%	0.33%	0.48%	0.05%	0.10%	0.57%	0.14%	0.05%
その他	0.29%	0.10%	0.19%	0.00%	0.00%	0.10%	0.19%	0.00%
詳細不明	0.14%	-	-	-	-	-	-	-

「同居する家族に、自宅にひきこもっている状態にある人」のそれぞれの属性について、全回答者に占める割合を算出したものである。

施策に向けての一言 <社会的ひきこもりについて>

近年、社会的ひきこもりが社会問題となっている。西宮の実情はどうであろうか。なお、社会的ひきこもりとは、国の定義では「仕事や学校に行かず、かつ家族以外の人との交流をほとんどせず、6ヶ月以上続けて自宅にひきこもっている」とし、国が対象年齢を15歳から39歳に限定した調査を実施しているが、本調査では対象年齢を限定せずに尋ねている。

問31は社会的ひきこもりへの共感度についてである。「はい」と「どちらかといえばはい」の合計をみると、「家や自室に閉じこもっていて外に出ない人の気持ちがわかる」が43.4%、「理由があるなら家や自室に閉じこもるのも仕方がないと思う」が48.1%となっている。閉じこもりへの理解度はかなりあるとあってよいであろう。また、「自分も、家や自室に閉じこもりたいと思うことがある」が18.6%、「嫌な出来事があると、外に出たくなくなる」が33.4%である。これらは割合としては高くないが、実数としてはかなりの数といえよう。

本調査は20歳以上の市民を対象としているので、国の実施した調査の対象年齢である15歳から39歳の年齢区分はできないが、それに近い20歳から39歳と40歳以上の年齢区分でみていくと特徴がわかる。「はい」と「どちらかといえばはい」の合計は、「家や自室に閉じこもっていて外に出ない人の気持ちがわかる」については、20-39歳で51.3%、40歳以上で40.9%と10%以上の差がみられる。「自分も、家や自室に閉じこもりたいと思うことがある」については、20-39歳で31.1%、40歳以上で14.6%と15%以上の差である。「嫌な出来事があると、外に出たくなくなる」については、20-39歳で41.3%、40歳以上で30.8%と10%を超える差がみられる。「理由があるなら家や自室に閉じこもるのも仕方がないと思う」については、20-39歳で54.0%、40歳以上で46.0%で8%の差である。いずれも20-39歳が40歳以上より高く、若い世代で社会的ひきこもりへの共感度が高いことを示している。

問32は回答者もしくは同居する家族の心の悩みについての希望する相談窓口を尋ねている。社会的ひきこもりに限定していない設問である。「親身に聞いてくれる」50.8%、「無料で相談できる」49.9%、「匿名で相談できる」38.4%が高い方の順である。他方、「民間団体(NPOなど)である」3.0%、「保健所等公的機関」7.8%は低い方である。まずは気楽に相談できる窓口を希望しているようである。

20-39歳と40歳以上の年齢区分別にみると、希望する相談窓口の順位の高い方ではほぼ同様の傾向であるが、順位の低い方ではやや異なる傾向がみられる。「保健所等公的機関」では、20-39歳6.5%、40歳以上8.2%、「自宅に専門家が来てくれる」では20-39歳9.8%、40歳以上10.2%、「精神科以外の医師の助言がうけられる」では20-39歳11.4%、40歳以上11.5%となっている。いずれもわずかの差であるが、40歳以上でより専門的な相談を求めているといえそうである。

問33は回答者本人もしくは同居する家族にひきこもり状態の人がいるかを尋ねている。2.3%が「いる」と回答している。実数としてはかなりの数になるのではなかろうか。問34はひきこもり状態にあるのはどのような方かを尋ねている。性別では男性よりも女性に多い。本人とする回答では40歳以上が多いが、子どもとする回答では15-39歳が多くなっている。

社会的ひきこもりの把握はむずかしく、きわめて個人的情報でもあることから、その実態はなかなかとらえにくい。本調査のデータは貴重な情報であり、市としての今後の取り組みに活かしてもらいたいものである。

(関西学院大学 森脇俊雅)